

“ロシアの侵略” という与太話を再確認する NATO

【訳者注】これを、一つ前の「ウラジミール・プーチン：西洋の唯一のリーダー」とぜひ併せ読んでいただきたい。この二人の論客に共通の論点が、なおはっきりするだろう。特に、ウクライナ問題についてはこちらの方が詳しい。クーデタを取り仕切ったヌーランド女史の盗聴された電話はよく知られ、Fuck the EU（EUなんて糞くらえ）と言ったのは有名な逸話になっている。

それにしても、これだけ見え透いた、転倒した作り事を、堂々と声明文にして発表しなければならぬ NATO 会議とは、いったい何だろうか？ 何か自分の意志でなく、魔物に動かされているようにさえ見える。これだけ世界がウソと隠し事と陰謀で固められながら、それを口にするのは許されない。暗黙のタブーになっている。それだけならよい。その果てに、このウソを根拠とした、全く理不尽な世界戦争の、少なくとも準備が着々と進んでいるのに、その報道が全くなされていない。我々は途方もない世界に住んでいる。これは理性を失くした、きわめて危険な、狂気の世界である。

Robert Parry

Consortium News, July 11, 2016



オバマ大統領と NATO のリーダーたちは、ロシアの卑怯者どもからいきなりパンチを食らったと言わんばかりの、自分の都合だけを考える西側の、虚偽の物語にサインをした。これは常軌を逸したか、ウソつきの症状を示す話である。

——ロバート・パリー

NATO 同盟国が、膨大な核兵器を含め、前代未聞の大量の兵器を、ロシア国境に並べ立てたという、集団的狂気のような話を聞けば、誰しも心萎えてしまうだろう。これは単に、NATO が、騙しの“戦略的情報”を公的に考え出さざるをえなくなって、騙されやすいに西側の市民にウソを真実と考えさせておくための、方便にすぎないと考えれば、より安心ができる。<https://consortiumnews.com/2015/09/02/usnato-embrace-psy-ops-and-info-war/>

しかし今回、西側の“民主主義”大国のリーダーが集まって、“ロシアの侵略的行動”を非

難する「ワルシャワ・サミット声明」を支持した——こうした主張が、彼ら自身の情報機関によって保証されていないことを知りながら！

リーダーたち——少なくともその中心——は、ロシア大統領ウラジミール・プーチンが 2014 年にウクライナ危機を挑発したとか、バルト諸国を侵略する計画をもっているとかいった、信頼できる情報がないことを知っている。にもかかわらず、ワシントンや西側政府のほとんどあらゆる“要人”は、その反対を真実として宣言している。

しかしこの真相が顔を見せた、ほんのわずかの瞬間もあった。例えば、終わったばかりのワルシャワ NATO サミットの直前に、NATO 軍事委員会議長 Petr Pavel 元帥が、NATO 軍大隊のバルト諸国への展開は、軍事的というよりも、政治的な行動だと洩らした。

「NATO の狙いは、広範囲なロシアの侵略に対して軍事的防壁を築くことではない。なぜなら、そのような侵略はアジェンダにあるものでなく、どんな情報能力でもそんなことは、わからないからだ」と、パーヴェルは記者会見で話した。

<http://www.reuters.com/article/us-nato-russia-pavel-idUSKCN0Z616T>

パーヴェルがふと洩らしたことは、私が、ある情報ソースから聞いていたことで、“ロシアの侵略”について西側メディアが盛んに書きたてていることは、情報局の分析によるものでなく、プーチンに対する巧みな悪魔化キャンペーンと、古典的なワシントンの「グループ思考」からくるものだけということである。

しかし皮肉にも、いかに同じプロパガンダ・キャンペーンが世界を悲惨なイラク戦争へ導いたかを示す、あのイギリスの「チルコット報告」が出た数日後に、NATO は基本的に、あの同じ悲惨な失敗を再現しようとしているのである——ただ違うところは、今度は賭け金を大幅に上げて、核武装しているロシアとの対決である。——世界は、あの時、不安定化された中東で起こった恐ろしい結果に、いまだに慄いているというのに。

このワルシャワ声明文——サインしたのは、オバマ大統領、ドイツのメルケル首相、フランスのオランド大統領、イギリスのキャメロン首相——は、2013 年末と 2014 年初めに、ウクライナで何が起こったかの現実を無視し、裏返しの物語をつくり出している。

オバマや他のリーダーは、中身のない西側のプロパガンダを反復する代わりに、何か新しいことを考え、真理を語ることもできた。しかしそれは明らかに、彼らの実行能力の外にあった。そこで彼らはこぞって、この危険なウソ物語にサインしたのだった。

本当は何が起こったのか

事実に基づいた本当の話ができたなら、ウクライナ危機を引き起こしたのは西側であって、ロシアではないと認識できたであろう。実際は西側が、選挙で選ばれたビクトル・ヤヌコビッチ大統領の暴力的な転覆を図り、モスクワとウクライナのロシア系国民を敵視する、西側寄りの新しい政権を押し付けたことによる。



2014年5月9日、群衆に向かって演説するロシア大統領ウラジミール・プーチン——
ナチスドイツに対する戦勝69年記念と、クリミアの海港都市セバストポリの、ナチスからの解放70周年を記念して。

2013年末、ウクライナとの経済的連携合意を押し進めていたのは、ヨーロッパ連合（EU）であった。そこには、ウクライナのすでに苦しんでいる人民に厳しい緊縮経済を押し付ける、国際通貨基金（IMF）の要求が含まれていた。このEU計画への政治的な、プロパガンダによる支援の一部は、米政府から出たもので、それは、全米民主主義基金（National Endowment for Democracy）や、アメリカ国際開発庁（US Agency for International Development）を通じてなされた。

ヤヌコビッチがIMFの条件に怯んで、プーチンからの、もっと寛大な150億ドルの援助パッケージを選んだとき、米政府は、大衆デモンストレーションの背後に公的支援金を投じて、ヤヌコビッチを転覆させ、EU合意に署名しIMFの要求を受け入れる、新しい政権に置き換えた。

2014年初頭に危機が深まると、プーチンは、ソチ冬季オリンピックで注目された——特に、この競技へのテロ攻撃があるのではないかと言われた。プーチンが密かにウクライナ危機を醸成したという説の、どんな証拠も提出されていない。実際、すべての証拠は、プーチンが現状を保護し、選挙された大統領を支持し、悪化する危機を避けようとしたことを示している。

ウクライナが連携合意をするようにする導く EU の不安定化計画を、プーチンが操ったか

のように言としたら、それは狂人であろう。——それから彼が、マイダンの抗議行動の反ヤヌコビッチ暴動を指揮し、ネオナチや他のウルトラ国家主義の軍団と協力して、ウクライナ警察を殺し、ヤヌコビッチをキエフから追放し、次に、猛烈な反ロシア政権をつくった？——そして一方で、彼はその反対のことをやったふりをしている！？

現実の世界では、この物語はまったく違っていた。モスクワは、ヨーロッパの仲立ちする早期の選挙と、大統領権限縮小の合意を含む、政治的妥協を図るヤヌコビッチの努力を支持していた。にもかかわらず、これらの譲歩を無視して、2014年2月22日、ネオナチの軍団が、アメリカの支援を受けた抗議暴動の前面に躍り出て、ヤヌコビッチと彼の高官たちを暴力で追い出した。米務省は直ちに、このクーデタ政権を“合法的”と認め、NATO 同盟国もそのようにした。

個人的に、私はときどき陰謀論者によって、事実の裏付けはないが、アメリカの高官が空想した黒い陰謀という彼らの説を、受け入れないといって批判された。しかし率直に言って、こうした怪しい話には根拠がないといっても、プーチンがウクライナのクーデタを指揮したという、西側のキチガイじみた陰謀説に比べれば、納得できるように思えた。

にもかかわらず、その根拠のないプーチン説が、ニューヨーク・タイムズのコラムニスト **Paul Krugman** のような真面目な論客とされている人たちを引き付けた。彼は、プーチンがこの問題を引き起こしたのだという説を、魔法のように作り出し、その目的は、土地の収奪をやったのけ、そして/または、ロシア人の経済的問題を解決するためだと言った。

「簡単に手に入れられるという錯覚が、やはり起こることがある」と、クルーグマンは2014年のコラムに書いた。「これは単なる推測にすぎない。しかし、ウラジミール・プーチンがウクライナ政府を倒すことができると考えたのは、ありうることに思える。あるいは少なくとも、その領土の大きな部分を、安い値段、つまり反政府軍へのわずかの援助によって手に入れるなら、それは彼の膝に落ちるだろうと…。」

<http://www.nytimes.com/2014/08/18/opinion/paul-krugman-why-we-fight.html?hp&action=click&pgtype=Homepage&module=c-column-top-span-region®ion=c-column-top-span-region&WT.nav=c-column-top-span-region&r=0>

“このものをうまく誕生させる”

クルーグマンは“単なる推測”でなく、生々しい事実にも注目することもできただろう——たとえば、ヨーロッパ問題担当のネオコンの米務次官補ビクトリア・ヌーランドが、クーデタを組織する陰謀を仕組んで、彼女の選んだウクライナ人を、ロシアの隣国のかじ取り役に

つけるという画策である。この暴動の数週前に、ヌーランドは、駐ウクライナ米大使ジェフリー・パイアットとの盗聴された電話で、“政権交代”を画策している現場を押さえられている。<http://www.bbc.com/news/world-europe-26079957>



ヨーロッパ問題担当米国務次官補 Victoria Nuland は、ウクライナのクーデタを要求し、後釜のリーダーの選出を助言した。

ヤヌコビッチの後釜に誰が座るかの問題について、ヌーランドの選択は、アルセニー・“Yats is the guy” ヤツェニュークだった。電話は長く続いて、どう“これをうまく繋ぐか”そして“このものをうまく誕生させるか”を思案している。クーデタが2014年2月22日に、うまく繋がれ、または誕生させられた後、ヤツェニュークが新首相として現れ、さっそく、IMF 緊縮経済計画をうまくやってのけた。

キエフのクーデタ政権はまた、ロシア系の人民に対する挑発的な政策を取り、例えば、ロシア語を公用語とするのを禁止する議会決定とか、ネオナチの過激派が反クーデタ抗議者を殺すのを許すといったことがあったので、ロシア系の人々のレジスタンスが東部や南部で起こった。これは驚くにあたらないことだった。なぜなら、東部ウクライナはヤヌコビッチの政治的地盤だったことと、ウクライナの経済的なヨーロッパ寄り、ロシアとの経済的繋がりの縮小から、彼らが多くを失う危険があったからである。

にもかかわらず、明白な東ウクライナの懸念を認める代わりに、西側のメディアは、ロシア系住民を、単なるプーチンの捨て駒で、自分の考えなどもっていないかのように描いた。アメリカに支援されたキエフの政権は、彼らに対して“反テロ作戦”を取り始め、ネオナチ軍団がその先兵となった。

クリミアでは——ここはロシア系人民が密集する、ロシアとの関係の長い歴史をもつもう一つの地域だが——人民は国民投票の結果、96%の圧倒的多数で、ウクライナから離れてロシアに再編入されることを希望した。これは、あらかじめウクライナ政府の合意を得た上で、クリミアに駐屯するロシア兵に守られて行われた。

ニューヨーク・タイムズや他の主流米メディアが主張するような、ロシアの“侵略”などなかった。ロシア軍はすでに、セバストポリの、ロシアの歴史的な黒海海軍基地に、配属されていたものだった。プーチンがクリミアの編入に合意したのは、一つには、この海軍基地が NATO の手に落ちる危険があり、ロシアに対する戦略的な脅威になることを怖れたからである。

しかし、プーチンは領土が欲しいので、またはロシア人を経済的困難から救うために、危機を挑発しているのだという狂った西側の陰謀説について言うなら、プーチンがクリミアを編入した肝心の理由は、ヤヌコビッチが追放され、キエフにロシアを憎む政権ができたからにすぎない。もしヤヌコビッチが追放されていなかったら、プーチンが、クリミアやウクライナに対して何かの干渉をしたと考える理由はない。

しかし、ひとたび間違った話が出回ると、これを止めることはできなかった。ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト、その他、主要な西側の新聞が、ちょうどイラク侵略へと駆け上がっていったときと同じ役割を果たし、米政府のプロパガンダを事実として受け入れ、世相にあえて逆らうわずかの独立ジャーナリストは無視された。

オバマ、メルケル、その他の主要なリーダーは、西側のプロパガンダがいかにウソに満ちているかを知っているが、彼らは自分の政府のウソの虜になっている。彼らが公的物語から大きく逸脱することは、強力なネオコンやその同盟メディアの、厳しい批判を浴びることになる。

NATO の“戦略的情報”に反対するわずかの発言をしてさえ、ドイツの外相フランク・ヴァルター・シュタインマイヤーは厳しい批判を受けた。彼はこう言った——「我々が今やってはいけないことは、サーベルをガチャつかせ、戦争ごっこをすることによって、現状に火を注ぐことである。…この同盟国の東国境で、シンボリックな戦車のパレードをやれば安全が保障されるだろうと信ずるのは、間違いである。」

ロシアを徹底的に傷つける

そういうわけで、ワルシャワ会議では、虚偽の NATO の物語を再確認する必要があった。そしてその通りになった。その声明文はこう宣言している——「ロシアの侵略的行動は—— NATO 領域の周辺での挑発的軍事活動や、脅迫と武力による政治的目標達成の、証明済みの意欲を含めて——地域の不安定の根源であり、基本的に NATO に挑戦するものであり、ユーロ大西洋安全保障に損害を与え、かつ、ヨーロッパが安全で自由で平和であることを目

指す、我々の長期に及ぶ目標を脅かすものである。…

http://www.nato.int/cps/en/natohq/official_texts_133169.htm

ロシアの不安定化の活動と政策には、次のようなものがある——現在進行中の、不法で非合法的なクリミアの編入——これを我々は認めず将来も認めないだろう、そしてロシアにその尊重を求める。武力による主権的国境の侵害。東ウクライナの意図的な不安定化。Vienna Document の精神に反する、大規模な、不意の軍事演習、およびバルト海、黒海領域、東地中海を含む NATO 国境近辺での、挑発的な軍事活動。無責任で攻撃的な核レトリック、軍事コンセプト、それに下に隠れた態勢。そして NATO 同盟領空の繰り返される侵犯。

加えて、シリアへのロシアの軍事介入と、相当規模の軍事プレゼンス、その政権への支援、また東地中海へ力を投影するための、黒海での軍事プレゼンスの利用——こういったことが、同盟国や他の国家の安全保障にとって、更なる危険と挑戦を突きつけている。



NATO 事務総長 Jens Stoltenberg が、2016 年 7 月 8 日、ポーランドの NATO ワルシャワ・サミットの開会宣言をする。NATO 国家首脳たちは、強化された多国籍軍大隊を、この同盟のロシアとの国境東部に送ることを合意。「これら的大隊は健全な、多国籍軍になる」と、ストールテンバーグは言った。

NATO や他の西側情報機関がいま住んでいる、上は下、白は黒の世界では、ロシアが自国国境内部で、NATO の動きに反応して国境沿いに軍隊を動かすことは、“挑発的”になる。同様に、ロシアが、イスラム主義テロリストや、他の西側の中東同盟——サウジアラビア、カタール、NATO メンバーのトルコなど——に援助された武装反乱軍から攻撃を受けている、国際的に認められたシリア政府を支援することも、挑発である。

言い換えると、NATO やそのメンバーが、イラクやリビア、シリアといった国を思いのままに侵略し、ウクライナで起こり、シリアで今起こりかけているように、他国を転覆させるのは全く構わない。しかし、NATO の外のどんな政府も、これに反抗したり、自衛するだけでも、許されないことなのだ。そんなことをするのは、NATO を挑発することである。そしてこのような偽善が、西側の主流メディアでは、世界が本来、意図されているあり方として受け入れられている。

そして、あえて、このようなウソやダブル・スタンダードを指摘する我々のような者たちは、
“モスクワの手先” でなければならない——ちょうど 2003 年に、イラクの大量破壊兵器の
話をあえて疑った者たちが、“サダムの弁解屋” として一蹴されたように。